

機能語ホドの用法と解釈

—数量表現をとるホドを中心に—

言語学・応用言語学専門分野

1LT14158S

2014（平成 26）年入学

吉武 柚里

2018（平成 30）年 1 月提出

要旨

本論文は、機能語ホドの用法について考察したものである。ホドには様々な用法があることが知られており、これまで何度も論じられている。しかし、そのほとんどはホドの程度を示す副詞的用法に重点を置いたものであり、数量表現をとるホドの用法についてはあまり深く考察が行われていない。そこで本論文では、数量表現をとるホドに着目し、数量表現を「数量詞によるもの」「名詞句によるもの」「用言・文によるもの」の3つに分けて考察を行った。そして、数量表現をとるホドには〈概数化〉〈値化〉〈高程度〉の3つの機能のホドがあると主張した。また、類似の機能語として知られるクライとの比較を行った結果、ホドとクライは多くの異なる機能を持っていることが分かった。

目次

1. はじめに	1
2. 機能語ホドの用法.....	3
2.1. ホドの基本義.....	3
2.2. ホドの様々な機能.....	4
2.2.1. 〈程度〉	4
2.2.2. 〈高評価〉	5
2.2.3. 〈同程度〉	6
2.2.4. 〈比例〉	7
2.2.5. 指示詞とホド.....	8
3. 数量表現とホド.....	10
3.1. 数量詞.....	10
3.2. 名詞句による数量表現	12
3.3. 文による数量表現	16
3.4. まとめ.....	19
4. 先行研究	21
4.1. 奥津（1986）	21
4.2. 森田（2007）	22
4.3. 井島（2008）	23
5. クライとの比較.....	25
5.1.ホドのみ使用できる例	25
5.2. クライのみ使用できる例	25
6. おわりに	28
参照文献	30

1. はじめに

機能語ホドには様々な用法があることが知られている。(1)の例文中のホドは全て異なる機能を持つものである。

- (1) a. 覚悟のホドを見せてくれ。
- b. 彼女は見違えるホドきれいになった。
- c. 先に進めば進むホド道は狭くなる。
- d. 1週間ホド前からアルバイトを始めた。
- e. 太郎は次郎ホド背が高くない。

ホドの用法の1つとして(1d)のような「数量表現をとるホド」が挙げられる。ホドの分類を行っている奥津(1980)¹や奥津(1986)において、このホドは「概数を表す形式名詞²」とされており、以下の例全てのホドが同じものとして扱われている。

- (2) a. [学生 5人 (ホド)]_{NP}がそこにいる³。[奥津 1986: 54, (7)1]
- b. [親指の頭ホドのコールド・クリーム]_{NP}をとって [奥津 1986: 54, (8)2]
- c. [地球を二つ並べた]_Sホドの距離 [奥津 1986: 55, (10)1]

奥津(1986)は、数量表現につくホドを「数量を示す名詞を受けて、それを概数化する『およその数量』を意味する形式名詞」(奥津 1986: 54)であるとしている。この3つの例は、数量表現にホドがついているという点では同じである。しかし、ホドのしている機能は全て同じであると言えるだろうか。そこで本論文では次のような問いに対する考察を行う。

- (3) 数量表現をとるホドはどのように機能しているのか。

数量表現を(2a)のような「数量詞によるもの」、(2b)のような「名詞句によるもの」、

¹ 奥津(1980)と奥津(1986)の内容は同一の点が多いため、以下では奥津(1986)を取り上げる。

² 形式名詞とは非自立的な名詞のことであり、「こと」「もの」「ところ」などがその例である。

³ 奥津(1986)では「ほど」とひらがな表記であるが、本論文では表記を統一するため、奥津(1986)から引用している例文は全て「ホド」とカタカナ表記に変更している。該当する例文は、(2)、(11)、(15)、(45)～(48)、(51)、(59)である。

(2c)のような「用言や文によるもの」の3つに分け、それぞれホドがどのように機能しているのか考察することで、(3)について明らかにする。以下では、まず数量表現を伴わないホドの機能について考察し、その後数量表現とホドの関係性をみていく。

2. 機能語ホドの用法

2.1. ホドの基本義

『広辞苑』第六版(2007)の「ホド」を引いてみると、名詞のホドは「①時間的な度合」、「②空間的な度合」、「③物事の程度や数量などの度合」、「④例示する意を表す」、助詞のホドは、「①おおよその時間とであることを示す」「②ころあい。程度。度合い」「③数量の程度。…ぐらい」「④理由。故」「⑤あることに比例する意を表す」(以上全て『広辞苑』第六版 2007: 2598)と説明されている。この定義から、ホドは「程度」や「度合」を示す機能が多いことが読み取れる。

また、機能語ホドの基本義が「程度」であるということは、様々な論文でも指摘されている。森田(2007)は、「『ほど』は『程』で、程度を表すのが基本義である」(森田 2007: 219)としている。

井島(2008)では、ホドを「程度」という概念で分析することが妥当であるかということについて以下のような考察を行っている。

- (4) a. おなかを壊すホドアイスクリームを食べた⁴。[井島 2008: 57, (23)a]
b. 見違えるホド痩せた。[井島 2008: 57, (23)e]

(4)の例文のホド句⁵を程度副詞「随分」と置き換え、その後さらに状態述語「ひどく」あるいは「たくさん」を補ってみる。

- (5) a. 随分アイスクリームを食べた。[井島 2008: 58, (24)a]
b. 随分痩せた。[井島 2008: 58, (24)e]
- (6) a. 随分たくさんアイスクリームを食べた。[井島 2008: 58, (25)a]
b. 随分ひどく痩せた。[井島 2008: 58, (25)e]
- (7) a. 随分おいしくアイスクリームを食べた。[井島 2008: 58, (26)a]
b. 随分きれいに痩せた。[井島 2008: 58, (26)e]

(5)は(7)という解釈の可能性があるにもかかわらず(6)の解釈になる。このことから、逆に程度副詞に修飾されたある種の状態述語は省略可能であるとしている。(5)のよう

⁴ 井島(2008)では「ほど」と記述されているが、本論文ではカタカナ表記で統一するため「ホド」と変更している。また下線はそのまま記す。該当する例文は(4)~(8)、(52)~(54)である。

⁵ 井島(2008: 57)は「ホドで結ばれた連用修飾句」を「ホド句」と呼んでいる。以下では、「ホドで結ばれた修飾句」を全てホド句と示す。

な状態述語がない場合には、対象や動作、事態の数量や、動作の強度というステレオタイプの意味で解釈されるとされている。以上の程度副詞における考察を、ホド句に戻して考えると、ホド句の場合も(8)のように「たくさん」「ひどく」などを補うことが可能である。このことから、ホドが程度副詞と似た動きをしていると言うことができ、よって「程度」を表すものとして扱われることは妥当であると結論付けている。

- (8) a. おなかを壊すホドたくさんアイスクリームを食べた。[井島 2008: 58, (27)a]
b. 見違えるホドひどく痩せた。[井島 2008: 58, (27)e]

2.2. ホドの様々な機能

本論文で取り上げる数量表現をとるホドの機能について考察する前に、ホドが持つ他の機能を、類似の機能語クライとの比較を交えながら説明する。以下では、原則として「P ホド Q」あるいは「P ホドの Q」の形式において、ホド前の内容を P、ホドの後ろの内容（主文や対象など）を Q とする。名詞としてのホドは、2.1 節で触れたため割愛し、また本論文の考察対象からはずす。

この章では、ホドの〈程度〉〈高評価〉〈同程度〉〈比例〉の4つの機能について説明する。「指示詞（これ、それ、あれ、どれ）+ホド」の形式は考察が難しいため、最後に2.2.5 項で取り扱う。数量表現をとるホド特有の機能については3章で述べる。

2.2.1. 〈程度〉

〈程度〉のホドは、ホドの基本義である「程度」を示すもので、多くの場合あるスケール上において Q の程度が高いことを表す。

- (9) a. 彼は放課後職員室に質問しに行くホド真面目だ。
b. 彼女は思わず見とれてしまうホド美人だ。
c. その料理は信じられないホドおいしかった。
- (10) a. 彼女は美人だ。思わず見とれてしまうホドだ。
b. 彼女は思わず見とれてしまうホドの美貌だ。

(9)は、ホドが〈程度〉として機能している例である。(9a)では、Q「真面目だ」ということの程度の度合いが高いことを、P「放課後職員室に質問しに行く」ことによって示す。このとき、Pに示されている内容は「Qであることによって起こり得る結果」である。つまり、「彼は真面目だから、放課後職員室に質問しに行ったりする」という因果関係が隠れている。(9b)も同様に、Q「美人だ」ということの程度がP「思わず見とれて

しまう」くらい高いということを示しており、こちらも「彼女が美人だから、思わず見とれてしまう」という因果関係が推測できる。一方(9c)の場合、Q「おいしかった」の程度が高いことをP「信じられない」で示している点は前の2例と同じであるが、PとQが「その料理はおいしかったから、信じられない」という関係性ではない。しかし、これはPとQの内容の性質の違いによるものであり、ホドの機能としてはQの程度が高いことをPによって示すというものであるため、(9)で示した3例で用いられているホドは、全て〈程度〉のホドであるとする。「PホドQ」の形で用いられる場合が多いが、(10)のように「Q。Pホドだ」や「PホドのQ」といった形で〈程度〉として機能する例もある。

(11)は、〈程度〉のホドであるが高程度は示していない例である。この例文では、「ほどほどに」という適当程度が示されている。奥津(1986)では「通常の程度⁶」と呼ばれている用法で、高程度であることを示す「非常の程度」のホドと区別されている。しかし本論文では、ホドが何らかの程度を示している点では同じであることから、(11)のようなホドも〈程度〉に含めることとする。

(11) まあぶっ倒れないホドに練習しなさい。[奥津 1986: 57, (16)1a 改]

〈程度〉のホドはクライと置き換えが可能である。ただし、クライの場合はただ程度の度合いを示しているだけであり、それが高程度であるという評価は伴わないように思われる。

- (12) a. 彼は放課後職員室に質問しに行くクライ真面目だ。
b. 彼女は思わず見とれてしまうクライ美人だ。
c. その料理は信じられないクライおいしかった。

2.2.2. 〈高評価〉

〈高評価〉のホドは、名詞句のPとQが「PホドのQ」という形でPの評価が高いことを示すという機能をもつ。〈程度〉と〈高評価〉は名称やその機能から似ているように感じられるが、〈程度〉のホドはPによってQの程度が高いことを示す一方、〈高評価〉のホドはPの評価が高いことを示すため、異なる機能として扱う。

(13) 田中さんホドの人材ならすぐに部長に昇進するだろう。

⁶ 奥津(1986)において、ホド前の内容(補足成分)が非常の事柄である場合を「非常の程度」、通常の事柄である場合を「通常の程度」としている。ただし、奥津自身も「『ほど』—『に』は任意の要素である—自体は単に程度を意味するだけ」とであると指摘している。

(13)では、P「田中さん」が高く評価されているQ「人材」であることを示している。このホドはクライと置き換えにくい。

- (14) a. ??田中さんクライの人材ならすぐに部長に昇進するだろう。
b. ok 田中さんクライの人材ならどこにでもいる。
c. *田中さんホドの人材ならどこにでもいる。

(14)から、ホドはPに高評価という意味を加えているが、クライは低評価の意味を付加していると考えられる。このクライの用法を〈低評価〉⁷とする。〈高評価〉のホドが用いられるとPには希少性があると認識されやすくなるため、(14c)のような文は容認できない。〈低評価〉のクライの場合は、「Pはたくさんいる(ある)可能性がある」という前提があることを暗に示しているため、(14b)のような文脈において自然な表現となる。しかし、クライには同程度を示す用法⁸もあるため、(14a)も同程度の解釈で捉えれば、(14b)より容認度は低いものの容認可能な表現となる。

2.2.3. 〈同程度〉

〈同程度〉のホドは、「QはPホド～ない」といった形で比較を示したり、「Qホド～P{もの/こと/名詞}はない」の形で最上級を示したりする用法である。Pは比較基準、Qは文の中心となる対象である。〈同程度〉用法では、2.2節の冒頭で述べた原則には従わず、ホドの前の要素であっても文の中心となる対象であればQと示す。

- (15) a. 日本はアメリカホド大きくない。[奥津 1986: 57, (18)2]
b. ロシアホド大きい国は他にない。

(15a)は、Pが「アメリカ」、Qが「日本」であり、「日本はアメリカと同じくらい大きい」ということを示し、それを打消しの語によって否定することで「日本はアメリカより小さい」という比較を表す。(15b)はPが「国」、Qが「ロシア」であり、否定語により「ロシアと同じくらい大きい国」という存在を否定することで「ロシアが一番大きい国である」ことを示す。(15)から、比較を表す場合も最上級を表す場合も、ホドは「同じくらい」と同程度を示す働きをしていると考えられる。

このホドをクライに置き換えてみよう。

⁷ 落合(2017)にて「低評価」用法とされていたため、これに倣い本論文でも〈低評価〉とした。

⁸ クライの同程度用法については、丹羽(1992)や須川(2006)などで触れられている。

- (16) a. *日本はアメリカクライ大きくない。
 b. ok 日本はドイツクライ大きい。
 c. *日本はドイツホド大きい。

- (17) ok ロシアクライ大きい国は他にない。

(15a)と(16)から、ホド句やクライ句⁹によって比較基準を示すとき、クライは肯定文中でのみ使用でき、ホドは否定文中でのみ用いられることがわかる。須川(2006)は、このクライとホドの使用制限について、クライは同程度を示すだけであるのに対し、ホドは強調の意味が伴うとしたうえで、「同程度をあらわすとき、否定形を通常使うことができない」(須川 2006: 6)からであるとしている。そして述部が肯定形である場合、同程度を示すものとなり、強調を示すホドは使用できなくなると説明している。この須川(2006)の解釈から、ホドの〈同程度〉用法はただ同程度であることを示すだけでなく、程度の強調をする機能も保持していると考えられる。

(17)に関しては、(15b)と同義であるように見えるが、森田(2007)では、ホドの文とクライの文では主題が異なるとされている。(15b)においては「ロシアホド」に点が置かれ、「ロシア」が主題となり「ロシアの大きさ」を強調するが、(17)では「他にない」に力点が置かれ「他」が主題となる。この説明からも、〈同程度〉のホドは、Qの程度を強調する機能も持っていると言える。

2.2.4. 〈比例〉

〈比例〉のホドは、「PホドQ」の形でPの程度とQの程度が相関関係にあることを示す。

- (18) a. 食べれば食べるホド太る¹⁰。[須川 2006: 8, (27)]
 b. 金持ちホドケチである。

(18a)では、P「食べる」という行為の程度が変化するにつれて、Q「太る」という状態の程度も変化するという比例関係であることを表している。(18b)では、P「金持ち」の程度の度合いが高いと、Q「ケチ」の程度の度合いも高いというPとQの相関関係を示す。Pが用言である場合は程度移動が伴うが、Pが名詞句の場合は比例関係にある2つの指数のある1点を指すため程度移動は伴わない。

⁹ ホド句と同様に、「クライの前要素+クライ」をクライ句とする。

¹⁰ 須川(2006)ではホドがひらがな表記だが、本論文では表記を統一するため「ホド」に変更している。(19)も同様に変更している。

Pに入る用言は現在形のみである。(19)のように、Pの時制が過去になると、ホドの使用は容認できなくなる。須川(2006)は、ホドの時制による使用制限について「比例の方向に変化していくもの(現在形)においては使用可能であるが、点と点における変化を示すもの(過去形)においては使用することができない」(須川 2006: 8)と説明している。

(19) *食べたら食べたホド太る。[須川 2006: 8, (28)]

このホドは、クライへの置き換えができない。

(20) a. *食べれば食べるクライ太る。

b. *金持ちクライケチである。

2.2.5. 指示詞とホド

まず、「これホド」、「それホド」、「あれホド」において、指示詞の指示内容がホド句やホド文¹¹の前に示されている場合と、指示内容が不明な場合に分け考察する。指示内容が明確な場合、「これ」「それ」「あれ」を指示内容に戻して考えると、ホドは〈程度〉のホドであると言えることができる。(21)は指示内容が明らかである例である。「太郎は2人分の弁当をあっという間に食べ終わったホドお腹が空いていた」として考えると、「お腹が空いていた」程度が高いことを示していることがわかる。

(21) 太郎は2人分の弁当をあっという間に食べ終わった。それホドお腹が空いていた。

指示内容が明らかでない場合を以下の例をもとに考える。

(22) a. あれホド言っておいたのに。

b. 大きいとは聞いていたが、これホド大きいとは思ってもみなかった。

(22a)では「あれ」の、(22b)では「これ」の指示内容が記されていない。しかし、(22a)ではこの発話がなされる前に「何かを何度も伝える」という行為が行われていたことが推測される。この文脈・状況を「あれ」で指していると考えられる。また、(22b)においては、発話者の予想の大きさの存在が読み取れ、この予想を「これ」によって示している。このことから、指示内容が明確でなくても文脈や話者の予想などを指示している

¹¹ ホド句が含まれる文をホド文とする。

思われる。よって「これ」、「それ」、「あれ」につくホドは〈程度〉のホドである。

次に、「どれホド」については、(23)のようにただ疑問詞として機能する場合と、(24)のように程度を強調するものとして機能する場合がある。

(23) 印刷用紙はどれホド必要ですか。

(24) その言葉にどれホド癒されたことか。

しかし、どちらも「どれホド」の機能であって、ホド自体の機能だけを取り出すことは難しい。したがって、「どれホド」は慣用句の1つとして扱うこととする。

最後に、「それホド～ない」という形式に注目する。この形で「思ったよりは～ない」「取り立てて言うほどではない」という意味を示す。

(25) 彼はそれホド背が高くない。

井島（2008）では、この表現の「それ」は明確な指示内容を持たないが、「聞き手、読者、あるいは世間一般に期待される程度」であって、「文脈において「あなたが思う」程度、「読者が予想する」程度、「多くの人が予想する」程度には実際は達していない、ということを表しているように思われる」と述べている。井島（2008）は、このホドを「期待との対照を表すホド」としており、本論文で〈同程度〉として扱っている用法と重なる。そこで井島（2008）に倣い、本論文においても「それホド～ない」の形式内のホドは〈同程度〉を示すものであると解釈する。

3. 数量表現とホド

ホドには2章で説明した〈程度〉〈高評価〉〈同程度〉〈比例〉の4つの機能に加え、数量表現をとるホドとして〈概数化〉と〈値化〉という機能もあると主張する。本論文では、「スケール上で値を示すもの」を数量表現とする。

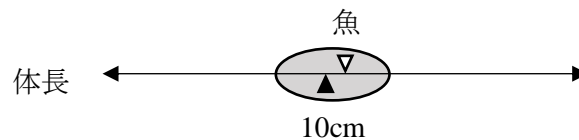
数量表現は、一般的に数量詞¹²によるものとされている。また、「みんな」「全員」「全部」「大部分」「半分」「一部」といった数量を表す名詞も存在する。これらの直接的な数量表現の他に、「名詞句によるもの」「用言・文によるもの」という2つの間接的な数量表現も扱う。以下では数量表現を「数量詞によるもの」、「名詞句によるもの」、「文によるもの」の3つに分け、それぞれの数量表現をとるホドの機能について、クライとの比較も行いながら考察する。

以下では、「Pホドの(Aの)Q」を基本構文とする。このとき、Pは数量表現として用いられるもの、Aはスケール名、Qは対象である。また図においては、矢印の左横にスケール名を示し、「▽」であるスケールA上でのQの位置、「▲」で同スケールA上でのPの位置を表す。

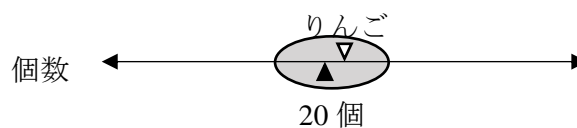
3.1. 数量詞

Pが数量詞である場合、ホドは数量詞の示す数量を概数化する。Aというスケール上のある値Pを示し、ホドがつくことによってその値Pの周辺を表す用法である。ホドのこの用法を〈概数化〉とする。〈概数化〉のホドはただQの数量を示すだけであり、その数量に対する評価は加わらない。以下の図では、ホドによって概数化された数量を楕円で囲むことで示す。

(26) a. 10cmホドの体長の魚



b. 20個ホドのりんご



¹²本論文では数量詞を、具体的な数を示す数詞に、どのような数量を示しているのかを表す助数詞が付加されたものと定義する。

(26a)ではPは「10cm」、Aは「体長」、Qは「魚」であり、魚が体長というスケールにおいて10cmという値の周辺(楕円内)に位置することを示している。同様に(26b)もPが「20個」、Aが「個数」、Qが「りんご」であり、「りんご」が「個数」というスケールにおいて「20個」という値の前後いずれか(楕円内)に位置することを示す。

P、A、Qの順序を入れかえてみると、不自然な表現になるものがある。(26a)を(27a)として再掲する。

- (27) a. ok 10cm ホドの体長の魚
b. ok 10cm ホドの魚
c. ok 体長 10cm ホドの魚
d. ?? 10cm の体長ホドの魚
e. ok 10cm の体長の魚
f. ok 10cm の魚
g. ok 体長 10cm の魚

(27a)が基本構文の形であり、(27b)はAを省略したもの、(27c)はAをPの前で示したもの、(27d)は「PのAホドのQ」としたものである。Pが数量詞の場合、(27a)～(27c)のようにAはホド句の前後どちらでも容認でき、また省略も可能である。また、(27e)～(27g)のホドを削除した3つの例から、数量詞単独の場合はその語順でも容認されることがわかる。

(27)の7つの語順のうち、(27d)は容認しにくい表現になっている。これは、数量表現にスケール名がつくことで、「数量表現+の+スケール名」全体が1つの句になり、数量詞的に機能するものとしてふるまうようになるためだと考える。数量表現が数量詞である場合、数量詞として機能するものが2通り考えられる状態になってしまうため、解釈しにくい表現になるのである。この点については、後述の「名詞句とホド」でも触れる。(27e)は「数量詞+の+スケール名」の順になっているにもかかわらず自然な表現であるのは、全体で1つの名詞句とは認識されず、「数量詞」と「スケール名」それぞれで認識されるからであると考えられる。つまり、(27e)は(27a)のホドを省略したものとして解釈される。

〈概数化〉のホドはクライとの置き換えが可能である。

- (28) a. 10cm クライの体長の魚
b. 20個 クライのりんご

数量詞にクライがつくことで、(28a)では「10cm」の周辺の数量を、(28b)では「20個」の周辺の数量を示す。このように、クライも数量詞をとる場合、〈概数化〉のホドと同

じように数量を概数化するものとして機能していると考えられる。

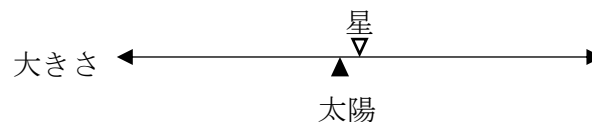
助数詞をとらず数詞だけの場合や「半～」という単語につく場合にも、〈概数化〉として機能する。しかし、(29c)のように「大部分」「一部」などの数量を表す名詞（「半分」を除く）はホドを伴わない。これは、数量を表す名詞の示す数量自体がすでに概数であるからだと考えられる。

- (29) a ok 全体の四分の三ホドの賛成票を得た。
b. ok 半日ホドの休みを使い、買い物に出かけた。
c. *この改正案は、大部分ホドの反対意見を押し切り採用された。

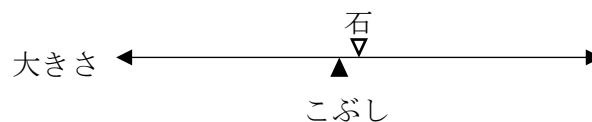
3.2. 名詞句による数量表現

名詞句による間接的な数量表現¹³をとるホドは、名詞句を値が示せるものに変えるという機能を持っている。この機能を「値化」、このホドを〈値化〉のホドとする。Pに入る名詞句は、単独ではスケール上で比較対象となる値を示すものとして機能することはできないが、ホドがつくことでこれが可能となる。ホドの機能によって値化したPをQの近似値として示すことで、Qのスケール上での位置を表す。ただし、Qの値に対する評価は加わらない。

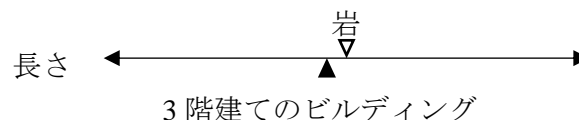
- (30) a. 太陽ホドの大きさの星



- b. こぶしホドの石



- c. 3階建てのビルディングホドもある岩

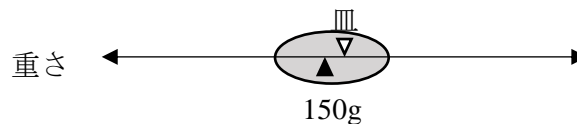


¹³ Pである名詞句はホドがついて初めて数量表現として機能するため、Pはただの名詞句なのだが、便宜上Pを「名詞句による間接的な数量表現」としている。

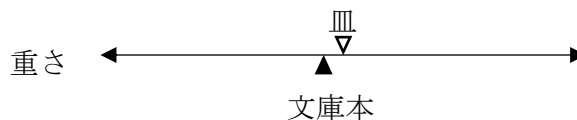
(30a)において、Pが「太陽」、Aが「大きさ」、Qが「星」である。P「太陽」がホドによって値化し、A「大きさ」というスケール上で値を示しており、この値とQ「星」の値が同程度であることを示す。(30b)はAが省略されている例であり、P「こぶし」という近似値を挙げることで、「大きさ」というスケールにおけるQ「石」の位置を示す。(30c)は大きさを誇張しているような印象を受けるが、これは助詞モの機能¹⁴によるものであり、ホドはP「3階建てのビルディング」を値化しているだけであると考えられる。「モ」以外に「シカ」「ガ」「ニ」など、ホドの直後に助詞が現れる例や、「QをPホド～して」など別の形式の例も観察されたが、どの例においてもホドの機能が〈値化〉であることに影響はなかった。したがって、PがQの数量の近似値として示されている名詞句による数量表現である場合は、「PホドのQ」の形式でなくてもホドの値化の機能に変化はない。

〈概数化〉のホドと〈値化〉のホドは、どちらのホドも対象Qのスケール上での位置を示すだけであり、いかなる評価も伴わないという点では同じである。しかし、この2つのホドは、異なる機能を持つものとして扱う必要があると考える。以下の(31)で示した例は、同じ皿の重さについて説明したものとする。

(31) a. 150g ホドの重さの皿



b. 文庫本ホドの重さの皿



(31)では、対象Q「皿」の重さをそれぞれ「150gホド」「文庫本ホド」と示している。(31a)においては〈概数化〉のホドであり、「150g」をぼかすものとして機能している。一方(31b)では〈値化〉のホドであり、P「文庫本」を値化しQ「皿」の近似値として示すことで「重さ」というスケール上でのQ「皿」の位置を表している。この2つの例において示したい数量は同じであり、またどちらの表現でも聞き手（読み手）に同様の意味を伝えると考えられる。しかし、〈値化〉のホドは、P「文庫本」を値化するだけであり、P「文庫本」の示す値をぼかしているわけではない。また、〈概

¹⁴ 沼田（1986）において、モが「数量詞をとりたてる場合は、その数量が強調される」（沼田1986: 165）と説明されている。ここでは数量詞ではないがホド前の名詞句が数量表現として機能しているため、強調の働きをしていると考えられる。

数化) のホドには値化の機能がない。このように、ホドの果たしている機能は異なるため〈概数化) のホドと〈値化) のホドは異なるものとするべきであると考える。

〈値化) のホドはクライと置き換えが可能である。

- (32) a. 太陽クライの大きさの星
 b. こぶしクライの石
 c. 3階建てのビルディングクライの高さもある岩

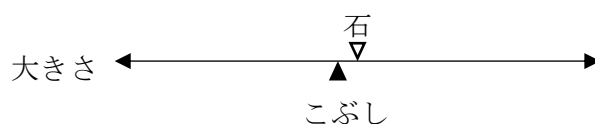
次に、〈概数化) のホドと同様に語順の入れ替えやホドの削除を行う。(30b)を(33b)として再掲する。

- (33) a. ok こぶしホドの大きさの石
 b. ok こぶしホドの石
 c. *大きさこぶしホドの石
 d. ok こぶしの大きさホドの石
 e. ??こぶしの大きさの石
 f. *こぶしの石
 g. *大きさこぶしの石

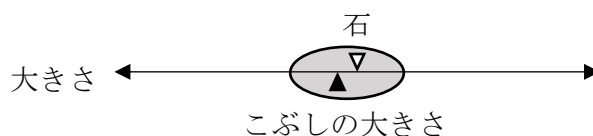
(33c)のように〈概数化) のホドとは異なり、スケール名がホド句の前に示されると非文になる。また、(33f)と(33g)が非文となることから、Pである名詞句単独ではスケール上で値を示すことができないことがわかる。したがって、Pの名詞句はホドによって値を示すものとして機能するように変化していると言することができる。

(33d)は自然な表現だが、(33a)で用いられているホドとは異なる機能を持っていると考える。

- (34) こぶしホドの大きさの石／こぶしホドの石



- (35) こぶしの大きさホドの石

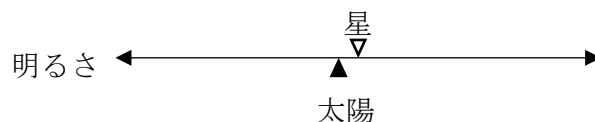


(34)は(33a)(33b)を、(35)は(33c)を図で示したものである。(34)のホドは〈値化〉であり、ホドがつくことで「こぶし」が大きさのスケール上で値を示すものとして機能している。そして、大きさのスケール上での「こぶし」の値と、大きさを示したい対象である「石」の値が近くに位置しているということを示すことで、「石の大きさ」を表現していると考えられる。一方、(35)は数量表現「こぶし」とスケール名「大きさ」が結びつき「こぶしの大きさ」にホドがつき、1つの名詞句になっている。このようにスケール名が数量表現と結びつき名詞句になる場合、その名詞句全体が数量詞化するという現象が起これ、**「こぶしの大きさ」が数量詞と同等のものとしてふるまう。「こぶしの大きさ」によって示された値がホドによってぼかされ、そのぼかされた数量範囲の中に「石」も位置すると解釈できるため、このホドは〈概数化〉である。ただし、おそらく話者（筆者）がこの違いを意識して使い分けることはなく、また聞き手（読み手）にはどちらも同じ意味を示すものとして認識されると思われる。**

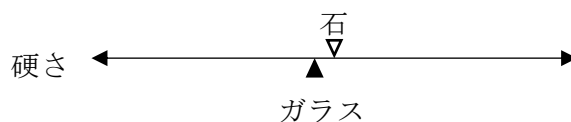
(33e)「こぶしの大きさの石」は、容認度は低いものの非文ではない。なぜなら、「石」が「こぶしの大きさ」と全く同じ大きさであるという状況下では許容できる表現となるからである。これも、「こぶしの大きさ」の形で数量詞的に機能していると考えると自然なことである。ただし、この状況自体がほとんど起これ得ないため、容認度は低い。

〈値化〉のホドは、(36)のように数量詞で示すことが一般的ではないスケールでも用いられる。

(36) a. 太陽ホドの明るさの星



b. ガラスホドの硬さの石



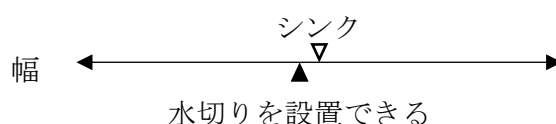
(36a)でのQ「星」のA「明るさ」を表す単位としては「ルクス」や「等級」が挙げられるが、実際にその数値がどのような値か想像はしにくいだろう。したがって、「明るさ」というスケールにおいて〈概数化〉のホドは現れにくくなる。(36b)ではQ「石」のA「硬さ」を表す単位として「モース硬度」というものが挙げられる。しかし、この単位の認知度は低いため〈概数化〉のホドは用いられにくい。このように、一般的に数量詞で表されないスケールにおいて、対象Qの値を示したい場合に〈値化〉のホドによって値化された名詞句Pで近似値を示すことができる。

3.3. 文による数量表現

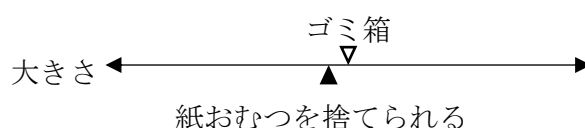
Pに文による間接的な数量表現¹⁵がくるとき、ホドはただ数量を示すだけの場合と、「Qはあるスケール上においてどちらかの端に寄っている」という高程度の意味を付加するものとして機能する場合がある。

まず(37)のように、PによってQのスケール上での位置を示すだけのホドを見ていく。これは〈値化〉のホドである。

(37) a. 水切りを設置できるホドの幅のシンク



b. 紙おむつを捨てられるホドの大きさのゴミ箱



(37a)では、Q「シンク」が「大きさ」スケールにおいてどこに位置するかを表すために、P「水切りを設置できる」が示されている。このとき、ホドは名詞句による数量表現をとるホドと同様にPを値化し近似値を示すという機能を發揮している。(37b)においても、P「紙おむつを捨てられる」を示すことで、「大きさ」スケール上でのQ「ゴミ箱」の値を表している。このように機能するホドは〈値化〉のホドであり、クライとの置き換えが可能である。

(38) a. 水切りを設置できるクライの幅のシンク

b. 紙おむつを捨てられるクライの大きさのゴミ箱

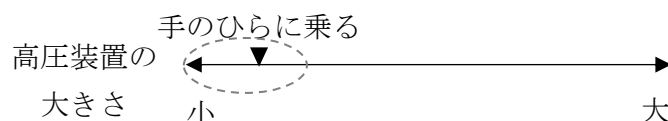
次に、ホドによってQがスケール上のどちらかの端に寄っていることを示す、つまり何らかの程度が高いことを示すホドを見ていく。このホドは、2.2節で説明した〈程度〉の機能をもつものである。

¹⁵ 「名詞句による間接的な数量表現」と同様に、Pによって数量が示されているわけではないが、数量で示されるスケールにおいて値を示すものであるため、便宜上「文による間接的な数量表現」としている。

(39) a. 鉄板を覆い尽くすホドの大きさのハンバーグ



b. 手のひらに乗るホドの大きさの高圧装置



c. 目を疑うホドの長さのくちばし

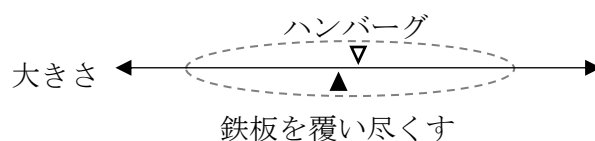


図において破線で囲んでいる部分が、「P ホド」が示す値の存在する可能性のある範囲である。このホドの場合、ただ対象 Q のスケール上での値を示すだけではなく、Q 自体が持っている属性¹⁶の 1 つである何らかのスケールにおいてどの程度であるかを示す。したがって、図に Q は出現しない。

また、何らかの評価を加えることでスケール上の両端どちらかに寄っているという解釈を可能にする。(39a)では、「ハンバーグ」の属性の 1 つである「大きさ」というスケールにおいて、P の「鉄板を覆い尽くす」という程度まで達している、または達しそうであることを示している。(39b)と(39c)も同様にある属性のスケールにおいて程度が高いという意味が付加されている。

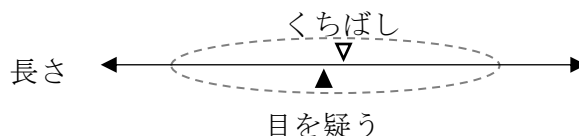
〈程度〉のホドの場合、クライに置き換えると意味の変化が見られる。破線で囲まれている部分は P が示すことができる値の範囲、つまり Q の存在する可能性のある範囲である。

(40) a. 鉄板を覆い尽くすクライの大きさのハンバーグ



¹⁶ 属性とは対象（モノやコト）が持っている性質のことである。例えば、「ハンバーグ」の属性として「おいしさ」や「ジューシーさ」「大きさ」「厚さ」などが挙げられる。

b. 目を疑うクライの長さのくちばし



(39)は(38)のホドをクライに置き換えたものである。このクライは、対象 Q のあるスケールでどの程度に位置するかを示す機能をしており、「程度が高い」という評価は加わらない。(40a)は、「このハンバーグは鉄板を覆い尽くす大きさに達している」という意味を、(40b)は「くちばしの長さが目を疑う長さに達している」という意味を示す。クライが用いられる場合、ただ大きさを示すために P が示されており評価は何も加わらないため、Q が A というスケール上においてどこに位置しても許容されると考えられる。したがって、ホドの場合と比べて破線で囲まれる範囲、つまり P が示す可能性のある値の範囲が広がる。以上のことから、ホドは対象 Q のあるスケールにおいて両端のどちらかに寄っていることを示すが、クライはスケール上での位置を示すだけである。

ここまで、文による間接的な数量表現をとるホドは、ただ数量をしめすだけという機能〈値化〉と、程度を示し、また高程度という意味を付加する機能〈程度〉の2つの機能をもつと述べた。しかし、この2つのホドの機能には明確な境界線がなく、どちらの用法でも解釈できる例も見られる。

(41) 人間が出られるホドの幅の隙間

(41)では、P が「人間が出られる」、A が「幅」、Q が「隙間」にあたる。この例では、隙間を見ながらただその幅を伝えているだけであるという解釈も、「隙間の幅」というスケールにおいて「狭い」という方向に寄っていることを示し「すごく狭い」という意味を付加していると解釈することも可能である。文脈や状況、聞き手（読み手）の知識・経験などによって、どちらの解釈で捉えるかが決まるのである。このように、P が文による数量表現である場合、ホドは機能によって2つに分けられるのではなく、〈値化〉と〈程度〉の2つの機能をどちらも保持しており、文脈等からどちらの用法で解釈されるかが決まると考えられる。

次に〈程度〉のホドの例文において、語順を入れ替えたりホドを削除したりしてみる。

- (42) a. ok 鉄板を覆い尽くすホドの大きさのハンバーグ
b.. ok 鉄板を覆い尽くすホドのハンバーグ
c. * 大きさ鉄板を覆い尽くすホドのハンバーグ
d. ?*鉄板を覆い尽くす大きさホドのハンバーグ
e. ok 鉄板を覆い尽くす大きさのハンバーグ

- f. ok 鉄板を覆い尽くすハンバーグ
- g. *大きさ鉄板を覆い尽くすハンバーグ

(42b)のように、文による数量表現をとるホドもスケール名の省略が可能である。しかし(39c)の場合、「目を疑うホドのくちばし」だけでは何が「目を疑うホド」であるのか補って解釈しにくいいため、スケール名「長さ」は省略されにくい。このように、Pが数量詞、名詞句の場合と異なり、Aが省略できない例も見られる。(42c)(42g)はAがPの前に示された例だが、どちらも非文となる。(42d)はかなり容認度が低く、(42f)は文法的には成立しているが、ただの状況説明になっており数量表現とは言えない。(42e)はハンバーグの大きさを説明しているだけであるのに対し、(42a)と(42b)は大きさというスケールの端に寄っているような印象を受ける。このことから、やはり〈程度〉のホドは高程度であるという意味を付加する機能を持っていると説明できる。

ここで(43)のように、「の大きさの」の部分を「大きい」と置き換えてみる。すると、ホドの場合とクライの場合には違いがほとんど見出されなくなる。これは、「大きさ」はスケール名を示すだけだが、「大きい」はスケール上の方向も示すためであると考えられる。(40a)では、大きさのスケール上で「ハンバーグ」がどこに位置しても許容されたが、(43b)では大きさのスケールにおいて「大きい」方に位置すると示されているため、「鉄板を覆い尽くすクライ」が示す可能性のある範囲が狭くなる。したがって、「大きさ」の場合より「大きい」の場合の方がホドとクライの解釈の違いが小さくなる。

- (43) a. 鉄板を覆い尽くすホド大きいハンバーグ



- b. 鉄板を覆い尽くすクライ大きいハンバーグ



3.4. まとめ

数量表現をとるホドには、〈概数化〉〈値化〉〈程度〉の3つの機能があると考えられる。

〈概数化〉は、ほとんどの場合数量詞につき、数量を概数化するという機能である。
 〈値化〉は、通常値を示すことがない名詞句や文を値化し、対象Qの近似値として示す

という用法である。この2つの用法は数量表現特有の用法であり、またクライへの置き換えが可能である。

〈程度〉のホドは、文や用言による間接的な数量表現につき、対象 Q のあるスケールにおける程度の度合いを示す。数量表現につく〈程度〉のホドは、その程度が高いことを強調する。2.2 節でも説明したとおり〈程度〉は数量表現特有の機能ではなく、またクライへ置き換えると意味の変化が見られる。

今まで「P ホドの A の Q」を基本構文として考察を行ったが、(44)のような基本構文以外の形でも P が数量表現であれば、本章で述べたホドの機能は変わらない。

- (44) a. このバッグは 10 年ホド前に買ったものである。
b. 石けんをピンポン玉ホドに泡立てる。
c. その道は、軽自動車 1 台通るのがやっとなホドの幅しかない。

4. 先行研究

以下では、奥津（1986）、森田（2007）、井島（2008）の3つの先行研究を取り上げる。井本（1999）や為頼（2004）、東寺（2015）では主にホドの程度用法に焦点を当てており、数量表現に関する表記は見当たらなかったため取り上げない。

4.1. 奥津（1986）

奥津（1986）は、ホドの文法的機能がいくつかに分化していることを指摘し、ホドを「名詞」「概数を表す形式名詞」「非常の程度」「通常の数度」「同程度」「比例」の6つに分類している。

このうち、数量表現に関わる分類項目は「概数を表す形式名詞」である。このホドは、数量詞あるいは数量概念につくことで、その数量を概数化するというものである。

数量名詞は名詞と結びつき名詞句を作るが、その名詞と分離して単独で主語や目的語になることもある。(45)のように、数量名詞のこの特性はホドの影響を受けない。

- (45) a. [学生 5人 (ホド)]_{NP} がそこにいる。[奥津 1986: 54, (7)1]
b. [5人 (ホド) の学生]_{NP} がそこにいる。[奥津 1986: 54, (7)2]
c. [学生]_{NP} が 5人 (ホド) そこにいる。[奥津 1986: 54, (7)3]
d. (学生は) 5人 (ホド) がそこにいる。[奥津 1986: 54, (7)4]

また、ホド前につく数量表現は数量名詞だけでなく、名詞句や文によって数量を間接的に表現するものもある。

- (46) a. [コールド・クリーム 親指の頭ホド]_{NP} をとって……。[奥津 1986: 54, (8)1]
b. [親指の頭ホドのコールド・クリーム]_{NP} をとって……。[奥津 1986: 54, (8)2]
c. [コールド・クリーム]_{NP} を 親指の頭ホドとって……。[奥津 1986: 54, (8)3]
d. (コールド・クリームは) 親指の頭ホドをとって……。[奥津 1986: 54, (8)4]

- (47) a. *[コールド・クリーム 親指の頭] をとって。[奥津 1986: 54, (9)1]
b. *[親指の頭のコールド・クリーム] をとって。[奥津 1986: 54, (9)2]
c. *[コールド・クリーム] を 親指の頭とって。[奥津 1986: 54, (9)3]
d. * (コールド・クリームは) 親指の頭をとって。[奥津 1986: 54, (9)4]

- (48) a. [地球を二つ並べた]_S ホドの距離 [奥津 1986: 55, (10)1]
b. *[地球を二つ並べた] の距離

(47)から、名詞句による数量表現にホドが付く場合ホドが削除できないことがわかる。このことから、ホドは数量を表す名詞を受けてそれを概数化し「およその数量」を意味する形式名詞であり、先行する数量表現はそれを修飾する成分とすべきであると述べている。

(47)や(48b)から、名詞句や文による間接的な数量表現の場合、数量詞の場合と異なりホドがなければ非文となることがわかる。この点は奥津(1986)も指摘しているが、ホドの機能としてはどれも「概数を表す形式名詞」であるとしている。

しかし、本論文では、ホドの有無が数量表現の働きに影響するかどうかは大きな違いであると考え、数量詞をとるホドと間接的な数量表現をとるホドを別の用法として扱った。(46)や(48)のようにホドの有無が重要であるものが〈値化〉、(45)のようにホドがなくても成立するものが〈概数化〉のホドである。

4.2. 森田 (2007)

森田 (2007) において、数量表現に関係している分類項目は「程度 (数量)」「程度 (比較基準)」の2つである。

「程度 (数量)」のホドは、「時間幅・期間、距離、人数や物の数、回数、金額など複数の集合体の量や範囲を、およそどの程度と示す表現」(森田 2007: 221)である。このホドは、クライやバカリと置き換えが可能である。

- (49) a. 看病のあいまに半日ホドの暇をぬすんでぬけて出ましたら¹⁷ [森田 2007:221]
b. その角筈の中で最も強い五人ホドが遠征にやって来たのである。 [森田 2007:221]

(49a)においては時間幅を「およそ半日」、(49b)においては人数を「五人ホド」と示している。また、(49a)は「半日クライ」や「半日バカリ」と言い換えることができる。(49b)も同様に置き換えが可能である。

「程度 (比較基準)」のホドは、名詞・指示詞につき、程度説明のための比較の基準を示す。示す数量の範囲の上限を区切って、その近似値に当たるものだと“程度の度合い”を漠然と示す。

- (50) a. ハワイホドの暖かさ [森田 2007:222]
b. 富士山ホドの高さ [森田 2007:222]

¹⁷ 森田 (2007) では「ほど」と表記されているが、表記を統一するため本論文では「ホド」に書き換えている。(50)も同様である。

c. おきんの背丈ほどな大きな山百合が沢山咲いて居た。 [森田 2007:222]

(50)では、それぞれ「ハワイ」「富士山」「おきんの背丈」と比較の例を示すことで、「暖かさ」「高さ」「大きな」の程度の度合いを示している。

森田 (2007) においては、概数を示すもの「程度 (数量)」と名詞句によって比較基準を示すもの「程度 (比較基準)」に分けているという点は、本論文の主張と重なる。しかし、後者が比較基準として近似値を示すだけでなく、その基準を値として機能するよう変化させるという機能を指摘したのが本稿である。

また、「程度 (比較基準)」のホドがつくのは名詞・指示詞に限定されているため、奥津 (1986) で言及された(51)のような用例はこの項目にあてはまらないことになる。

(51) 地球を二つ並べたホドの距離 [奥津 1986: 55, (10)1]

しかし本論文では、(51)のホドは(50)で用いられているホドと同じように比較基準を示すものとして機能していると主張する。

4.3. 井島 (2008)

井島 (2008) では、「数量詞をとるホド」という項目がある。

「数量詞+ホド」は、奥津 (1986) でも指摘されているように、数量詞と同じ振る舞いをする。ホドがつくことによって当該数量前後のうちいずれかの値 (概数量) とする) であることを示す。「数量詞+ホド」の場合、評価述語¹⁸が存在しない例が多い。

(52) ここでは何しろバラの扇面だけでも柳行李に一杯ある始末だから、とてもみんな見切れなかったが、それでも四日間に二百五十点ホド見た。 [井島 2008: 62, (31)a]

しかし、評価述語または評価基準が示されている表現も少なからず見られる。

(53) 直径は一メートル半ホドでその底を二センチホドの深さで水が流れていた。
[井島 2008: 63, (32)b 抜粋]

井島 (2008) は、数量詞でなくても同様の表現が存在するとし、以下の例を挙げてい

¹⁸ 評価述語とは、ある評価基準に対してプラスかマイナスどちらかの評価が加わったものである。本論文においてスケール名と呼んでいるものが評価基準にあたる。

る。

- (54) a. 洞窟の天井はかがんで歩かなければならないホドの低さだった。[井島 2008: 64, (33)a]
- b. 私はためしに近くにあったこぶしホドの大きさのいしを中に落としてみたが、どれだけ待っても何の音もしなかった。[井島 2008: 64, (33)b 抜粋]
- c. そこには気が遠くなりそうなホドの数の蛭がいた。[井島 2008: 64, (33)e 抜粋]
- d. 指先のこごえるホドの寒さが、三月に入ってもなおしつこく、月のなかばすぎまでつづいたが、 [井島 2008: 64, (33)h]
- e. 魚屋はみとれるホドの美しさ。[井島 2008: 65, (33)k 抜粋]

数量詞+ホドの場合には、評価基準がなくても容易に復元することができる。これは、数量詞だけの場合も同様である。

以上のように井島（2008）では、数量詞をとるホドと間接的な数量表現をとるホドを同様の表現として扱っている。一方本論文では、(52)が〈概数化〉、(53)(54)が〈値化〉の機能をもつホドとし、異なる用法として扱っている。数量表現がどのようなものであるかによってホドが異なる機能を発揮するということを指摘したのが、本論文独自の論点である。

5. クライとの比較

ホドの機能について考えるうえで、類似の機能語とされるクライとの比較も行った。すると、ホドのみに見られる機能とクライのみに見られる機能が見られたため、以下で述べる。

5.1. ホドのみ使用できる例

2.2 節での各用法の説明においてクライが使用できないことを述べていたが、もう一度ここで確認しておく。

- (55) a. ok 食べれば食べるホド太る。
b. *食べれば食べるクライ太る。

(55a)は〈比例〉のホドが用いられている文である。しかしクライの場合は、程度の変化を示すことができないため、比例関係を表せない。須川(2006)では、クライは同程度を示すことが基本義であるとしており、「同程度としての意味では状態の程度の進行を表すことができない」(須川 2006: 7-8)と述べている。

- (56) a. ok その教会は驚くホドの美しさだった。
b. *その教会は驚くクライの美しさだった。
(57) a. ok あれホド言っておいたのに。
b. *あれクライ言っておいたのに。
(58) a. ok 田中さんホドの人材はなかなかいい。
b. ??田中さんクライの人材はなかなかいい。
(59) a. ok 日本はアメリカホド大きくない。[奥津 1986: 57, (18)2]
b. *日本はアメリカクライ大きくない。

(56)(57)は高程度という意味を付加している〈程度〉、(58)は〈高評価〉、(59)は〈同程度〉である。2章で説明した通り、ホドは高程度という意味を付加するという機能がいくつかの用法に備わっている。しかし、クライはただ程度の度合いを示すだけであり、評価を加える用法は〈低評価〉だけであるため(56)~(59)では用いることができない。

5.2. クライのみ使用できる例

ホドは容認されずクライだけが使用できる場合の例を以下で挙げる。ただし、ホドの考察をした結果発見したものであるため、クライだけの機能は他にもある可能性がある。

(60)は 2.2 節でも説明した〈低評価〉のクライである。一方、ホドには〈高評価〉の用法はあるが、〈低評価〉の用法は存在しない。これは前述の通り、ホドには高程度であるということを付加する機能が備わっていると考えられるためである。

- (60) a. ゴミ捨てクライしてよ。
b. *ゴミ捨てホドしてよ。

(61)~(64)の例は、ただ「同程度」であることを示すものであるが、ホドは使用できないものがほとんどである。これらの例から、クライは数量詞に付く場合と同じように、クライの前の名詞句をぼかしていることがわかる。したがって、名詞句につくクライはホドと同様の〈値化〉の機能に加え、「何かをぼかす」という〈概数化〉と似た機能も兼ね備えていると考えられる。

また、これらにホドが使用できない、あるいは容認されにくいことから、ホドには〈同程度〉用法があるものの、高程度であるという意味を付与する隠れた機能があるため、ただ「同程度」を示す場合には用いられないと考えられる。さらに、ホドの〈概数化〉の機能は数量詞あるいは数量詞的に機能する名詞句にのみ発揮されると言える。

- (61) a. ok これは江戸時代クライから受け継がれてきた伝統です。[落合 2017: 11, (29)a]
b. *これは江戸時代ホドから受け継がれてきた伝統です。
(62) a. ok ここから駅クライまでは徒歩で十分です。[落合 2017: 11, (30)a]
b. *ここから駅ホドまでは徒歩で十分です。
(63) a. ok 幼稚園児クライの小さな女の子が目撃されたそうだ。[落合 2017: 11, (31)a]
b. ??幼稚園児ホドの小さな女の子が目撃されたそうだ。
(64) a. ok 娘は人参と同じクライ、ピーマンも嫌いだ。[落合 2017: 12, (37)]
b. *娘は人参と同じホド、ピーマンも嫌いだ。

(65a)は、丹羽 (1992) においてクライの程度用法を説明する際に挙げられていた例文である。〈程度〉のホドには程度が高いという意味を付与する機能が備わっているため、「ちょうどいい」という程度を示すには適さないとされる。したがって(65a)は容認度が低い文となる。

- (65) a. ok 歯ごたえが残るグライ¹⁹がいい。[丹羽 1992: 1119, ⑩b]
b. ??麺は歯ごたえが残るホドがちょうどいい。

¹⁹ クライとグライは同じものとして扱う。また、丹羽（1992）ではひらがな表記だが、表記を統一するため、カタカナ表記に変更している。

6. おわりに

これまで、ホドの機能について例文やクライとの比較を交えながらみてきた。

2章ではホドの基本義を述べた後、〈程度〉〈高評価〉〈同程度〉〈比例〉の4つの用法について説明した。

3章では、数量表現につく場合のホドの機能について、数量表現を3つに分けて考察した。その結果、ホドには2章で述べた用法の他に〈概数化〉と〈値化〉という機能が明らかになった。〈概数化〉のホドは先行研究においても触れられていたが、〈値化〉のホドは〈概数化〉のホドと同等に扱われていることが多かったため、本論文独自の解釈であると言える。

〈概数化〉のホドはほとんどの場合数量詞につき、数量を概数化することで対象の数量を示すという用法である。一方〈値化〉のホドは名詞句または文につき、名詞句・文を値が示せるものへと変化させ、対象の近似値を示すことで対象の数量を示すという用法である。また、〈程度〉のホドが文による数量表現につくこともあり、程度が高いという意味を付加する。

以下は、2章から4章で説明したホドの機能をまとめた表である。ただし、「なるホド」「どれホド」などの慣用句は除外している。

表：ホドの機能と例

	機能	例
程度	PによってQの程度の度合い（多くの場合高程度であることを示す）。	彼女は驚くホド美人だ。
高評価	Pの評価が高いことを示す。	田中さんホドの人材はなかなかいい。
同程度	QがPと同程度であることを示す（ただし最上級の場合Pは文中には出現しない）。またQの程度が高いことを強調する。	太郎は次郎ホド背が高くない。 ロシアホド大きい国は他にない。 彼はそれホド背が高くない。
比例	Pの程度とQの程度が相関関係であることを示す。	金持ちホドケチである。
概数化	数量を概数化する。	10cmホドの魚が泳いでいる。
値化	P（本来値を示すことがないもの）を値化し、Qの近似値を示す。	こぶしホドの石がある。 シンクは水切りを設置できるホドの幅である。
名詞	程度や時などを表す。	覚悟のホドを見せてくれ。

5章ではクライとの比較を行った。ホドは程度について高いという評価を付加するが、クライは同程度であることを示すだけであり、原則として程度についての評価は付加しないという違いがあることが分かった。クライの例外として、程度が低いということ、つまり「たいしたことない」という評価を加える〈低評価〉用法がある。また〈値化〉のクライは、〈概数化〉と似た機能も兼ね備えているのではないかと考察した。この点に関しては、ホドとの比較の中で観察されたことであるため、今後クライの機能についてより深い考察が必要である。その後、もう一度ホドの機能と比較を行うことで、今回発見できなかった新たな相違点が見つかるのではないかと考える。

参照文献

- 井島正博 (2008) 「クライ・ホド・ナド・ナンカ・ナンテの機能と構造」『日本語学論集』4: 42-97.
- 井本亮 (1999) 「「ほど」構文の解釈と主文の有界性について：述語動詞句の動詞分類を中心に」『筑波日本語研究』4: 42-70.
- 森田良行 (2007) 『助詞・助動詞の辞典』東京：東京堂出版.
- 丹羽哲也 (1992) 「副助詞における程度と取り立て」『人文研究』大阪市立大学大学院文学研究科紀要, 44(13): 1115-1150.
- 沼田善子 (1986) 「とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』105-225. 東京：凡人社.
- 奥津敬一郎 (1980) 「「ホド」一程度の形式副詞一」『日本語教育』41: 149-168.
- 奥津敬一郎 (1986) 「形式副詞」『いわゆる日本語助詞の研究』28-104. 東京：凡人社.
- 落合里紗 (2017) 「副助詞クライの機能と用法」卒業論文, 九州大学.
- 新村出 (編) (2007) 『広辞苑』第六版. 東京：岩波書店.
- 須川友美 (2006) 「日本語の程度をあらわす助詞について～ホド、クライの意味と用法～」卒業論文, 九州大学.
- 為頼梨絵 (2004) 「形式副詞ホドの非常用法について」卒業論文, 九州大学.
- 東寺祐亮 (2015) 「程度表現のホドの意味的特性と構造」『九州大学言語学論集』35: 227-238.

謝辞

本論文の執筆にあたり、担当教官の上山あゆみ先生には、ご多忙の中丁寧にご指導していただきました。ここで感謝の意を表します。また、ご指導いただきました九州大学文学部言語学・応用言語学研究室の久保智之先生、下地理則先生、太田真理先生、アドバイスをくれた研究室の仲間をはじめ、本論文執筆にご協力いただいたすべての皆様に感謝いたします。ありがとうございました。